

# 土用の神話とイヴァンの狂気

渡 邊 浩 司

## はじめに

2003年8月前半に、ヨーロッパを記録的な猛暑が襲ったことは記憶に新しい。フランスでは高齢の人々が多く命を落とし、8月だけでも1万人以上の犠牲者を数えたと言われている。このうだるような暑さ、ならびに夏の酷暑が続く時期を、フランス語では「カニキュール」(canicule)と呼んでいる。日本の暦に当てはめれば、おおそ立秋の前18日にあたる「夏の土用」、あるいは初伏・中伏・末伏(夏至以後の3回目・4回目と立秋以後の最初の庚の日)の総称にあたる「三伏」がこれに相当する。

ラテン語で「小犬」を意味する「カニークラ」(canicula)に由来する「カニキュール」は、大文字で始めるとシリウス(中国名は天狼星)を指す。大犬座の中に位置するシリウスは、7月22日から8月23日の期間、太陽と同時刻に昇没するが、まさにこの時期が天文学的な意味での「夏の土用」である。古代から中世にかけて西欧では、この時期は気象学的に暑い時期に対応するだけではなく、灼熱を宇宙的規模の大異変と考える、一連の神話的伝承が数多く伝わる時期でもある。本稿では、この酷暑の時期を神話学的な観点から捉え、クレチアン・ド・トロワ作『イヴァンあるいは獅子の騎士』<sup>1)</sup>(以下『イヴァン』と略記)の主人公を襲った狂気の意味を再考してみたい<sup>2)</sup>。

## 1. ソティスとナイル川の増水

古代エジプト人は、大犬座を構成する星の中で最も明るいシリウスをソティスと呼んでいた。古代エジプト人にとって、ソティスが日の出直前に昇ること(伴日出、英語では heliacal rising, フランス語では lever héliaque)は、ナイル川の増水という一種の宇宙的奇跡の開始を意味した。これは、7月18日あたりに生じた現象であるという。70日間、東方の地平線から姿を消していたソティス

が、71日目のほの暗い明け方に、再び東方の空に識別される。しばらくして、ソティスの現れた場所の近くに、日の出が肉眼で認められる。「この重要な天体現象にはそのとき、＜洪水＞の激しい波の到来が伴う—アフリカの中央部から白ナイルによって集められた堆積物の運び手である＜洪水＞、この白ナイルは青ナイルのエチオピアの二支流によってとりわけたっぷり豊かにされている。」<sup>3)</sup>

豊穡を約束するナイル川の増水と、ソティスが日の出直前に昇ることとの関連は、古代エジプト人の生活のリズムを決定したばかりか、神話伝承や信仰心を培うのにも手を貸した。ソティス出現の日は年初と定められ、その日にはソティスの雌犬が贈り物とされた。この雌犬の特徴は、短い脚、立った耳、上向きの尾と首輪であった。ローマ人はエジプト占領後に、この天空現象を重視し、元日に尾の巻かれた雌犬の像を贈るといった民間の慣習を受け継いでいる。図像表現としては、ソティスの雌犬の像のほかにも、ソティスが若い女神の姿で、小犬の背に「横乗り」している素焼きなどが残っている<sup>4)</sup>。

ピエール・サンティーヴによると、ソティスの昇没は、エジプトの死者の神アヌビスが姿を現したり、姿を消したりするのに等しいとされたという<sup>5)</sup>。アヌビスはイヌ（あるいはジャッカル）の姿をした神であり、オシリスの秘儀の中心人物でもある。ところでエジプト人は、シリウスのうちにオシリスの靈魂が宿っていると信じ、オシリスの再生をシリウスが東に昇りナイル川が氾濫する時期と結び付けていた<sup>6)</sup>。この文脈で考えれば、イヌ＝アヌビスとソティスが暦の上で結びつくことになり、同時に灼熱や早魃といった気象現象を、イヌの象徴のもとで捕らえるようになったのは当然の成り行きである。

ソティスが日の出直前に昇るといった現象は、春分点の位置が1年間に約50秒3逆行する現象、いわゆる歳差のために、何千年も経過するうちに暦のなかでズレを生み、現在カイロでは8月初めに観測されるという。このように暦に変動が生じたとしても、神話自体は変わることなく、地中海に生まれた諸文明の中に統合されていったのである。

## 2. 土用の聖女マリ・マドレーヌ

シリウスをめぐる天文学的伝承は、西欧中世の教会建築の一角に、思わぬ形で残されている。ロマネスク美術の白眉と言われる、ヴェズレーのサント＝マ

リ＝マドレーヌ聖堂(12世紀前半に建立)のチュンパヌム(半円形壁面)が1つの鍵をもたらししてくれる<sup>7)</sup>。堂内に入ってすぐのナルテックス(玄関間)にあるチュンパヌムの図柄は、キリスト昇天の10日後に起きた「聖霊降臨」の場面であるが、この半円を取り巻く飾りアーチの部分には、黄道十二宮と月々の労働図を表す円環が交互に並べられている。ここで注目したいのは、中央に坐すキリストの頭上にあたる部分にある3つの円環で、左から右にかけて「犬」「軽業師」「セイレン」が、いずれも背を丸めて回転しているが如くに描かれている。

「犬」の左には「かに座(巨蟹宮)」が、「セイレン」の右には「獅子座(獅子宮)」の象徴が見られることから、「犬」は大犬座で最も明るいシリウスと同定できるだろう。またギリシア語に置き直して考えると、シリウスに相当する「セイリオス」(Seirios)が、「サイレン」のギリシア語形「セイレン」(seiren)に音声上近いのは偶然とは思われない<sup>8)</sup>。外弧の中央にシリウスを喚起する「犬」と「セイレン」が配置されたのは、祝日を7月22日に持つ、この聖堂の守護聖人マリ・マドレーヌ(マグダラのマリア)が、夏の土用の聖女であることから納め得る。マリ・マドレーヌはその崇敬成立の過程で、元来は別個に存在した、夏の土用の時期に起こる不可解な増水(河川の氾濫や大地からの水の湧出)にまつわる伝承を取り込んでいる<sup>9)</sup>。

### 3.『イリアス』とセイリオス

全24巻からなるギリシア最古の叙事詩『イリアス』(前8世紀の中頃から末期に成立)の中にも、シリウスをめぐる伝承の痕跡を垣間見ることができる。ホメロスは第5歌冒頭を次のように書き出している。

この時パラス・アテナは、テュデウスの子ディオメデスに、アカイア全軍中特に目覚ましい働きを示してその名を挙げさせようと、力と勇気とを授けた。その兜と楯とから炎々たる火焰を燃え上がらせたが、そのさまは、大洋(オケアノス)に浴みして晩夏の夜空に煌々と輝きわたる星のよう、その星にも似た火焰を頭から肩から燃え上がらせ、大軍の相撃つ戦場の真直中に彼を押しやった<sup>10)</sup>。

ディオメデスの兜と楯から立ち上る火焰の形容に登場する「晩夏の星」は、ギリシア語でセイリオスと呼ばれたシリウスを指している。ここでは熱源としての、星の際立った明るさに力点が置かれているが、『イリアス』のクライマックスである第22歌の冒頭では、シリウスにまつわる不吉な側面もあらわになってくる。ヘクトル最期の段にあたる第22歌は、アキレウスがアポロンの謀略に気づき、イリオスに向かう場面から始まる。アキレウスの疾走する姿を、プリアモスが目にする件は、次の通りである。

収穫時に現れる星の如く、輝きながら走って来るアキレウスを最初に認めたのは老王プリアモス、その星の光は、丑三つ時の夜空に、群がる星の間でも一際鮮やかに目に立って、世に<オリオンの犬>の異名で呼ばれるもの、星の中では最も明るく、また凶兆でもあり、惨めな人間どもに猛暑をもたらす。走るアキレウスの胸の上の青銅の武具がその星の如く輝いた<sup>1)</sup>。

この後プリアモスは、息子のヘクトルにアキレウスとの一騎討ちを思いとどまらせようとするが不首尾に終わり、やがてはヘクトルの落命という最悪の事態を迎える。この一節では、シリウスの際立った明るさに加え、猛暑をもたらす凶兆としての側面にも触れられている。

#### 4. ウェルギリウスとシリウス

ウェルギリウス(前70年～前19年)が、前39年頃に執筆を開始し、前29年に完成した『農耕詩』には、樹木栽培をテーマにした第2歌中、若木の育て方を説明する件(vv.346-353)に、シリウスへの言及が認められる。

さてつぎは、農地にどのような若木を植えるにせよ、  
豊かな肥料を撒き、多量の土で覆うことを忘れるな。  
水をよく吸う石か、ざらざらした貝殻も土に埋めよ。  
その間水を通り抜け、呼吸のための薄い空気も地中に通い、  
作物は元気づくだろうから。石や重い大きな土器の破片を、  
若木の上を覆うように置く人も、今までに幾人もいた。

これは、雨が滝のように降るときや、暑さをもたらす天狼星が  
畑を乾かし、地面がぼかりとひび割れるとき、若木を守るものになる<sup>12)</sup>。

シリウスへの言及はさらに、養蜂を扱う第4歌の掉尾を飾る、牧人アリスト  
エウスの物語 (vv.315-558) 中、プロテウスの捕獲の場面 (vv.425-452) にも認めら  
れる。アリストエウスは、病と飢えのために養蜂を失い悲嘆にくれるが、やが  
て母親にあたるニンフのキュレネの助言に従い、プロテウスという予言者を鎖  
で捕らえて、養蜂を失った原因を聞き出すことに成功する。プロテウスは巨大  
な洞穴に身を隠すのが常だったため、キュレネは息子を洞穴の中の陽の当たら  
ない場所に潜ませた。プロテウスが海から上がってこの洞穴を目指して帰って  
くる件の直前には、次のような詩行が見られる。

今や天狼星は、渴いたインド人を激しく焦がしながら  
天空に燃え、炎のような太陽は、軌道の半ばを  
走り終えていた。草はしおれ、うつろな川は底が乾き、  
太陽の光線で、泥まで熱くなるほど焼かれていた<sup>13)</sup>。

いずれの引用箇所でもシリウスは、灼熱と日照りをもたらす元凶と考えられ  
ている。これに対し、ウェルギリウスが最後の11年間で執筆したと考えられる  
長編叙事詩『アエネーイス』には、シリウスがもたらす影響について詳細な描  
写が見られる。この作品は、トロイアの英雄アエネーアスが様々な苦難を経て、  
ローマ建国の礎を築くまでを歌った詩である。シリウスへの言及は、第3巻中、  
カルタゴでディードに迎えられたアエネーアスが、彼女にトロイア陥落とその  
後の経緯を話す件の中に見られる。「初夏に入るや、ただちに」トロイアを離れ  
たアエネーアスは、船団を率いてまずトラキアに至るが、次に立ち寄ったデロ  
ス島で神託を誤り聞き、クレタ島に行く。シリウスの招く災厄がアエネーアス  
一行を襲うのは、この島でのことである。

いまや、乾いた岸に船の引き上げも終わり、  
若者らは結婚に、新しい畑の耕作にと立ち働いて、

わたしは掟と家々を授け始めていた。と、突如、四肢を蝕むものが  
汚染された天の一隅から襲った。無惨に  
木々と作物を破滅させる悪疫の季節であった。

人々はいとしい命を落とすか、あるいは、体を痛々しく  
引きずった。このとき、田畑はシリウスに焼き尽くされて不毛となり、  
草は枯れ、病んだ作物は日々の糧をなることを拒んだ<sup>14)</sup>。

アエネーアスはその後まもなく幻夢により、本来一行が向かうべき場所はイ  
タリアであったことを神々から知らされる。この一節が描くシリウスの灼熱の  
影響は作物のみならず、人間にも及んでいる。

『アエネーイス』の後半は、アエネーアス率いるトロイア軍と、トゥルヌス  
率いるルトゥリ軍との戦いに焦点が当てられている。第10巻では、ラウレンテ  
ス人の王ラティーヌスは、その娘ラウィーニアが異国からやって来る人と結ば  
れると予言されていたため、娘をアエネーアスに申し出ることになるが、母ア  
マータは娘をすでにルトゥリ人の王トゥルヌスに嫁がせると約束していた。ア  
エネーアスは、河の神ティベリーヌスの勧めで、アルカディア人の王エウアン  
ドルスを訪ねて援軍を得た後、エトルリアでも多くの部隊を味方につけ、兩陣  
営が相対する場所へ戻ってくる。海岸には多くの艦隊が集い、船上のアエネー  
アスは次のように描かれる。

アエネーアスの頭は天辺が燃え立つ。兜の頂きから毛飾りが炎を  
吹き出し、黄金の盾はあふれる火を吐く。

それはまさに、澄み渡る夜空で彗星が  
呪わしい血の赤に輝くとき、あるいは、シリウスの炎熱、  
あの渇きと病をもたらして死すべき人間を苦しめる星が  
現われて、不吉な光で天を鬱(ふさ)ぐときのように<sup>15)</sup>。

この後アエネーアス一行が上陸し、ルトゥリ軍の攻撃を受けることになる。  
この一節では、アエネーアスの燃え立つ兜と盾をシリウスの炎熱になぞらえら  
れているが、その属性として「渇きと病」の元凶であることが手短かに言い添え

られている。

## 5. 疫病と狂犬病の恐怖

先述した『アエネーイス』第3巻に見られる、クレタ島でシリウスの招く災厄は、トゥキュディデス（前460年頃～前400年頃）の『戦史』が報告する疫病を思い起こさせる。ペロポネソス戦争の経過を克明に描いた『戦史』は、前431年から前404年の27年間のうちの21年間で8巻にまとめた未完の書である。このうちの第2巻によると、戦争第2年目はペロポネソス軍の第2回アッティカ侵入により幕を開ける。その時期は前430年の夏が始まってすぐのことである。このアッティカ侵入開始後まもなくして、疫病がアテナイ人の間に初めて発生した。既に何らかの病気に罹っていた人はこの病気に付き着いたが、健康な人々には次のような症状が見られたという。

その他の人々の場合には、何の徴候もなく、良好な健康状態にあるときに、突然まず頭部を強い熱に襲われ、眼の充血と炎症に冒され、更に口内部では咽喉と舌が直ちに血のように赤くなり、そして異常で悪臭のある息を吐いた。次いで、その結果くしゃみと声の嘎れが起こった。やがて苦痛が激しい咳を伴って胸部へと下って来た。そして苦痛が胃袋へと落ち着くと、それを反転させ、医者たちによって命名されている全種類の胆汁の嘔吐が続いて起こったが、これにも大変な苦痛が伴った。そして多くの場合、空の嘔き気が襲って激しい痙攣を起こさせたが、これには直ちに鎮まる人と後まで長引く人と両方があった。そして外面では触ってみても余り熱くなかったし、青白くもなく、むしろ小さな水疱や腫瘍が吹き出しているため赤味を帯び、また鉛色であった。しかし体内は激しく焼けており、極めて軽い衣類や亜麻布その他のもので覆われるのも我慢できず、裸体になる以外は耐えようがなく、冷水に身を投ずるのが最も心地よかったことであろう。事実、看護されずに放置されていた患者の多くは、絶えず渴きに苦しめられていたので、溜井の中へ飛び込んだものである。しかし飲んだ水の量が多かろうと少なかろうと、結果は同じであった。しかも安静に過ごす方法がなく、絶えず不眠にも苦しめられていた。というのは、疫病が絶頂期に

ある間は、身体は衰弱せず、その災難に意外に抵抗するのであった。大多数の病人は体内の燃焼のために7日目か9日目頃に、なお多少の体力が残っているうちに死亡した<sup>16)</sup>。

この疫病はさらに、肉体的な苦しみだけでなく、精神的にも大きな痛手をもたらしたという。

しかし、この惨事の中で最も恐ろしかったのは、発病したと気づいたときに起こる気力喪失であった。彼らは精神的に直ちに絶望へと向かい、自暴自棄に走るばかりで、抵抗しようとしなかったからである<sup>17)</sup>。

アテナイ人を襲ったこの疫病が今日の何病にあたるかについては諸説あり、毒茸の感染説、チフス説、麻疹説などが挙げられている<sup>18)</sup>。疫病の蔓延した時期は「夏」と明示されているが、具体的には6月に相当するようである<sup>19)</sup>。「実証的歴史学の祖」と称えられるトゥキュディデスが正確な事実記述を自覚していた以上<sup>20)</sup>、疫病が流行し始める時期をシリウスと関連づけることは困難であるが、その後疫病がまる2年にわたって猛威を振るった以上、ここにもシリウスの影が認められるのではないだろうか。

同じギリシア世界では、時代が下るが、パウサニ阿斯(160年頃活躍)の『ギリシア記』第1巻第6章に、コロイボスによる怪物退治との関連で疫病への言及が見られる<sup>21)</sup>。アルゴス王クロトーポスの娘プサマテーが、アポロンの子を生むが、父を恐れて子を遺棄する。すると王の羊飼いの番犬たちが子供を見つけて食い殺してしまう。これに立腹したアポロンは、アルゴス市にポイネ(「罰」、「復讐」の意)という怪物を送りつける。母親から子供たちを掠め取っていたこの怪物を殺したのが、英雄コロイボスである。しかし怪物殺害後、人々を疫病が襲ったという。コロイボスはデルポイへ赴いて巫女から託宣を受け、アポロン神殿と村の建設を行ったという。ここには犬に食い殺された子供の名前が見られないが、伝承ではリノスとされ、父に殺された母ともども祀られ、祭礼の時には出会った犬を殺める習慣があったと言われる<sup>22)</sup>。ここでは疫病の蔓延する時期は特定できないが、疫病の直接の原因となった犬への警戒心が窺われる。



この犬は、夏の土用との関連を持つ神話的存在なのではないだろうか。

大プリニウス(23年～79年)が著した、全37巻からなる『博物誌』第2巻40には、夏の土用と狂犬病の関連が次のように明示されている。

ところで、太陽の熱は犬座の昇る際に上昇することを知らないものがあるだろうか。この星座の影響は地球上、非常に広い範囲で感ぜられる。それが昇るときは、海が荒れる。地下室のブドウ酒は波立ち、水溜りは擾される。エジプトにガゼルと呼ばれる一種の野生動物がいるが、原住民の話では、この動物は犬座が昇るとき、それに向って立ち上り、そしてまずくしゃみをひとつしてから、礼拝するようにそれを凝視する。実際、その期間中ずっとイヌが狂犬病に罹りやすいというのは疑いを容れない<sup>23)</sup>。

また第8巻63には、この言及を踏まえた次の記述が見られる。

イヌの狂犬病は、すでに言ったように、シリウス星が輝いている期間には人間にとって危険である。それはそういう状況のとき咬まれた人に狂犬病を起こすからだ<sup>24)</sup>。

語源上「小犬」に他ならないカニークラ＝シリウスの灼熱は、このように人々を狂気へと誘っているのである。

## 6. イヴァンの狂気

クレチアン・ド・トロワが著した『イヴァン』の主人公を襲った狂気は、本稿で検討した夏の土用の文脈に置き直せば、その神話的意味が氷解する。「バラントンの泉」での試練を経て、泉の奥方ローディーヌを妻に迎えたイヴァンは、戦友ゴーヴァンの助言に従い、決められた期日に戻る約束をして出立する。ローディーヌはイヴァンに、1年後の聖ヨハネ祭の1週間後(Huit jorz après la Saint Johan, v.2576)、つまり7月1日に戻ってくるようにと念を押した。それにもかかわらず、イヴァンはゴーヴァンと一緒に馬上槍試合を転戦し、それに時間を取りすぎているうちに、妻との約束をすっかり忘れてしまう。

イヴァンが妻のことを考え始めたのは、アーサー王がウィンチェスターで宮廷を開いた「8月半ば」(a la mi-aost, v.2681) のことであり、既に期限を1ヵ月半も超過していた。やがてローディーヌの女使者がアーサー王一行のもとに現れ、イヴァンを皆の前で裏切り者呼ばわりし、ローディーヌがもはや彼を愛していないことを告げ、愛の証であった指輪をイヴァンの指から引き抜いて帰っていく。うちひしがれたイヴァンは仲間たちの許を去り、幕舎から遠く離れる。狂気がイヴァンを襲うのは、まさにこの時である。

Lors se li monte uns torbeillons

El cheif, si grant que il forsane ; vv.2805-06

(その時、彼の頭に眩暈が昇り、それがあまりにも強かったので、彼は理性を失ってしまう。)

その後イヴァンは森の中で野人同然に暮らし、正気を取り戻すには、ノロワゾンの奥方の登場を待たなければならない。奥方の指示で、侍女が眠りに落ちていたイヴァンに、奥方が所有する妖精モルガンの軟膏を塗る場面は次の通りである。

Tant li froia au chaut soloil

Les temples et trestot le cors

Que del cervel li issi fors

La rage et la melencolie ; vv.3004-3007

(暑い太陽のもと、侍女はイヴァンのこめかみと身体全体に膏薬を塗りつけたので、彼の脳から狂気とメランコリーが抜けていった。)

イヴァンを襲った狂気は「rage」と呼ばれ<sup>25)</sup>、物語中単独でも現れるが、この箇所では「メランコリー」と並置されているのは示唆的である。狂気は、ローディーヌの女使者登場の後に起こるが、使者が乗り物に使う「黒い」儀仗馬は、語源的に「黒胆汁」を意味する「メランコリー」を、既にこの時点で予兆していると言えるだろう<sup>26)</sup>。この狂気は、ヴァンサン・ド・ボーヴェや13世紀の医

師たちが、「犬のメランコリー」(melancolia canina)と呼ぶものに他ならない<sup>27)</sup>。犬との関連は、大犬座が空に姿を見せる時に猛威を振るう、語源上「小犬」に他ならないカニークラ＝シリウスの影を呼び覚ますのである。

ウェールズの幻想物語集『マビノギオン』の中には、『イヴァン』に対応する『ウリエンの息子オウアインの物語、あるいは泉の貴婦人』(以下『オウアイン』と略記)が含まれている。『オウアイン』の成立年代は13世紀と推定されることから、『イヴァン』以降の作品となるが、両者には共通のモデルが存在したと考えられ、『オウアイン』の方が古い形態を留めている。『オウアイン』では、アルスル(アーサー)が奥方に、3ヶ月間オウアインをプリダイン島へ同行させてほしいと頼み、奥方から承諾を得る。ところが3ヶ月どころか、3年経過してしまう。やがて乙女がアルスル王の宮廷にやってきて、オウアインを非難し指輪を取り上げ、それに続いてオウアインが野人に等しい生活を送るうちに、ある伯爵夫人の所有する塗り薬により正気を取り戻すという筋書きは『イヴァン』と同工異曲である。しかし『オウアイン』では、この間の挿話群が何月に起きているのかが明かされないばかりか、主人公を襲う狂気の具体的描写が見られない。それでも、軟膏の持ち主である奥方と2人の侍女がイヴァンの姿を見かける場면을『オウアイン』に求めると、そこには興味深い詳細が認められる。

ある日、伯爵夫人と侍女たちが、湖のほとりをそぞろ歩きしながら、苑の中央までやって来た。すると、苑の中に人めいたものの姿があるのを目にして、すっかりおびえてしまった。それでも、近づいてしげしげと見つめ、さわって、確かめてみた。動脈が息づいているのが認められた。男は、太陽の熱にあたってうめき声をあげていた<sup>28)</sup>。

オウアインが正気を取り戻すこの挿話が1年のどの時期にあたるかは明示されないが、陽光が主人公の苦しみを助長するという補足的説明は、夏の土用の神話の延長線上にあるように思われる。また、陽光のもとで軟膏により狂気を癒すというのは、病の治癒にその原因となった灼熱の太陽を用いることに等しく、言わば毒をもって毒を制したことになる<sup>29)</sup>。

## 終わりに

クレチアン自身は明示しないが、ペニアルス写本 147 が伝えるウェールズの小話によると、イヴァンは、異界アンヌウヴンの王の娘に他ならない夜の洗濯女とウリエンの子であるとされている<sup>30)</sup>。二人が交わった場所は、ウェールズ北部のデンビにある「犬の遠吠えの浅瀬」の近くであり、時期はサウインの夜であった。サウインとはケルトの4大祭の1つで11月1日にあたることから、イヴァンの誕生は、その9カ月後の8月1日(ケルトの祭ルグナサドにあたる)周辺に想定することができる。とすればイヴァンは夏の土用の申し子で、「獅子座」生まれということになる。従って、夏の土用の時期に「土用」の犬に噛みつかれて野人となったイヴァンは、狂気を脱した直後に、紛れもない己の分身であるライオン<sup>31)</sup>と遭遇したと考えられるのである。

## 注

- 1) Chrétien de Troyes, *Yvain dans l'édition des Œuvres complètes* (sous la direction de Daniel POIRION), Paris, Gallimard, 1994.
- 2) イヴァンの狂気については別稿で、作品中の「神話の時間」との関連で考察したことがある(拙稿「イヴァンの狂気と<神話の時間>」,『仏語仏文学研究』(中央大学仏語仏文学研究会), n.32, 2000, pp.1-18)。
- 3) クリスチアナ・デローシュ=ノブルクール(小宮正広訳)『エジプト神話の図像学』, 河出書房新社, 2001, p.36.
- 4) 同書 pp.37-41.
- 5) Pierre SAINTYVES, *Saint Christophe, successeur d'Anubis, Hermès et Héraklès*, Paris, 1936, p.41.
- 6) バーバラ・ウォーカー(山下主一郎ほか訳)『神話・伝承事典—失われた女神たちの復権—』, 大修館書店, 1988, p.199.
- 7) ヴェズレーのサント=マリ=マドレーヌ聖堂については、例えば、辻本敬子・ダーリング益代『図説ロマネスク教会堂』, 河出書房新社, 2003, pp.4-19 を参照。
- 8) Claude GAINEBET et Jean-Dominique LAJOUX, *Art profane et religion populaire au Moyen Age*, Paris, PUF, 1985, p.137.

- <sup>9)</sup> Philippe WALTER, *Mythologie chrétienne. Fêtes, rites et mythes du Moyen Age*, Paris, Imago, pp.167-172.
- <sup>10)</sup> ホメロス(松平千秋訳)『イリアス(上)』, 岩波文庫, 1992, p.139
- <sup>11)</sup> ホメロス(松平千秋訳)『イリアス(下)』, 岩波文庫, 1992, p.308.
- <sup>12)</sup> ウェルギリウス(小川正廣訳)『牧歌／農耕詩』, 京都大学学術出版会, 2004, pp.128-129.
- <sup>13)</sup> 同書 p.201.
- <sup>14)</sup> ウェルギリウス(岡道男・高橋宏幸訳)『アエネーイス』, 京都大学学術出版会, 2001, p.108.
- <sup>15)</sup> 同書 p.460.
- <sup>16)</sup> トウキュディデス(藤縄謙三訳)『戦史』, 京都大学学術出版会, 2000, pp.193-194.
- <sup>17)</sup> 同書 p.195.
- <sup>18)</sup> トウーキュディデース(久保正彰訳)『戦史』, 岩波文庫, 1966, p.394 (236頁2行目のための注).
- <sup>19)</sup> 同書 p.324 (年表中, 紀元前430年夏の項を参照)。
- <sup>20)</sup> トウキュディデスの方法論や立場については, 松本仁助・岡道男・中務哲朗編『ギリシア文学を学ぶ人のために』, 世界思想社, 1991, pp.193-200(「トウーキューディデース」)を参照。
- <sup>21)</sup> パウサニアス(飯尾都人訳)『ギリシア記』, 龍溪書舎, 1991, p.88.
- <sup>22)</sup> Pierre GRIMAL, *Dictionnaire de la mythologie grecque et romaine*, Paris, Presses Universitaires de France, 1951, p.263.
- <sup>23)</sup> 中野定雄・中野里美・中野美代訳『プリニウスの博物誌第I巻』, 雄山閣, 1986, pp.97-98.
- <sup>24)</sup> 同書 p.375.
- <sup>25)</sup> トブラー=ロマツチュの『古仏語辞典』(Tobler-Lommatzsch, *Altfranzösisches Wörterbuch*)では, この用例に«Raserei, Wut»という語義が添えられている。「狂気」(«folie»)を意味する«rage»としては, 例えば『ロランの歌』に次の2例がある(テキストは, Gérard MOIGNET, *La Chanson de Roland, texte original et traduction*, Paris, Bordas, 1989, 邦訳は神沢栄三訳を用いた)。1) シャル

ルがガヌロンに言った台詞‘ (...) « Vos estes vifs diables. / El cors vos est entree mortel rage.’ (vv.746-747)「そちはまさに悪魔の化身、体内に狂気の怒りが宿りたるなり」、2) 死の迫ったロランの描写中の一節‘Par sun orgoill cumencent mortel rage;’ (v.2279)「傲れる心ゆえ致命の狂気を演じたるなり」。またマリ・ド・フランスの『短詩集』所収「狼男」の序には、次の例がある(テキストは Marie de France, *Lais*, Edition bilingue de Philippe WALTER, Paris, Gallimard, 2000, 邦訳は月村辰雄訳を用いた)‘Garualf, c[eo] est beste salvage : / Tant cum il est en cele rage, / Hummes devure, grant mal fait, / Es granz forez converse e vait.’ (vv.9-13)「狼男、というのは野獣であって、この狂気に取りつかれているかぎり、人間をむさぼり喰らい、大層な害をなし、森の奥深くを徘徊して暮すという」。

<sup>26)</sup> イヴァンを襲う狂気を、タブーを守らなかった人間男性に対する妖精(あるいは女神)の復讐という観点でとらえると、ローディーヌの女使者の役割は、古代の復讐女神たちの役割に類似してくる(Cf. Philippe WALTER, « La morsure du soleil. Yvain et la Peste selon Chrétien de Troyes », *Figures*, 13-14, 1995, pp.43-55. ここでは pp.47-49)。例えば、『アエネーイス』第6巻で、アエネーアスがクーマエの巫女シビュラに伴われて地下界に下る直前の場面に、復讐女神たちへの言及がある。アエネーアスが動物供儀を行った後に、次の一節がくる。「すると見よ、太陽がその門口より昇ろうとする刹那、/ 足の下で地面が呻り、木々繁る稜線が / 揺らぎ始めた。闇を通して雌犬らが吠えるように思われた。/ 女神がやって来たのだ。」(前掲書、岡・高橋訳『アエネーイス』p.257)ここで夜と月の女神ヘカテーのお供として登場している雌犬たちは、エウメニデス(復讐女神たち)に他ならず、その登場が日の出と同時期であるのが注目される。この見方を『イヴァン』に重ね合わせれば、「夏の土用」の時期に主人公に狂気を招く女使者は、雌犬に対応することになる。

<sup>27)</sup> Philippe WALTER, *Canicule. Essai de mythologie sur Yvain de Chrétien de Troyes*, Paris, Sedes, 1989, pp.155-186.

<sup>28)</sup> 『マビノギオン 中世ウェールズ幻想物語集』(中野節子訳), JULA 出版局, 2000, p.263.

<sup>29)</sup> Chrétien de Troyes, *Yvain ou le Chevalier au lion*, Edition de Philippe WALTER,

Paris, Gallimard, 2000, p.120 note 2.

<sup>30)</sup> Roger Sherman LOOMIS, *Arthurian Tradition and Chrétien de Troyes*, New York, Columbia University Press, 1961, pp.269-273.

<sup>31)</sup> 中世フランス文学においてライオンが持つ両義的な性格については、ジャック・リバル（原野昇訳）『中世の象徴と文学』、青山社、2000、pp.83-84 を参照。

## Le mythe caniculaire et la folie d'Yvain

Kôji WATANABE

Dans *Le Chevalier au lion* de Chrétien de Troyes, c'est au mois d'août que le héros Yvain est frappé de folie, après avoir manqué à la promesse qu'il avait faite à sa femme. Certes, d'un point de vue psychologique, son état peut s'expliquer par le désespoir. Mais une relecture de l'épisode de la folie à la lumière du mythe de la Canicule permet de proposer une interprétation calendaire. Si l'on en croit Homère, Virgile, Thucydide, Pausanias et surtout Pline l'Ancien, l'influence néfaste de la Canicule, l'étoile la plus brillante de la constellation du Chien, est indissociable de ce que les médecins médiévaux appellent la « mélancolie canine ». C'est dans ce contexte astrologique et zodiacal que la folie d'Yvain acquiert un sens mythologique, comme l'a magistralement démontré Philippe Walter.